



日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association 2017.4 第67号



提◆言

SPF豚の医療貢献

～これまでの50年で培われた強みを活かす～

日本SPF豚協会理事・全農畜産サービス株式会社 種田 ^{あつよし} 貴至

初めまして、全農畜産サービス株式会社の種田です。昨年6月に現日本SPF豚協会会長である北島氏の後任社長となり、昨年から当協会の理事をやらせていただいております。私は、くみあい飼料会社の営業部署や全農の畜産生産振興部署および飼料畜産中央研究所を経て現在の職場に参りました。このため、豚に関しては特別詳しいわけではなく「なまくら」な人材です。

さて、当協会は本年10月で設立48周年になり、この間、我が国におけるSPF豚の認知度を高めるために先人諸先輩方が血のにじむ努力をされてきたことは想像に難くないところです。このような先人の方々のご努力が実り、今やSPF豚は医療分野でも注目されるものとなりつつあります。

前職場の全農飼料畜産中央研究所では、SPF豚を実験用として医科系大学や医療機器メーカー等に販売していました。このように食用を目的として飼育されてきた豚が実験用として使用される時には、「豚」ではなく、「ブタ」とカナ表記されます。したがって、これらのブタは実験動物の業界では「実験用家畜ブタ」と言われています。数年前、この仕事に初めて関わった時に、私は「実験用家畜豚」と表記し、ある営業マンから「あなたはシロートだ！実験用のブタは豚ではなくブタ！」と修正されたことを思い起こします。

日本実験動物協会ホームページの「実験動物総販売数調査」によれば、実験用ブタの使用は近年増加していることが窺われます。日本実験動物協会や日本実験動物技術者協会がブタを専門とする研修会を開催してきた努力等により、着実にその使用頭数を増やしています。その結果、今年5月25日から27日に福島県郡山市で開催される日本実験動物学会総会では、実験用ブタに関するプログラムがかなり盛り込まれています。

ミニブタは初めから実験用途として生産され使用されます。ミニブタの清浄性は極めて高く、遺伝的均一性や生化学的データの豊富さ、なおかつ長期飼育しても家畜ブタのようには大きくならないため、医薬品開発における安全性試験など精密なデータが求められる試験での使用が主となっています。

一方、実験用家畜ブタは、ミニブタに比べて頭数の確保が容易なため、多頭数を必要とする医療用手技や実験等に向いているという特長があります。

SPF豚は通常のコンベンショナルの豚よりも衛生レベルが高いという長所を有しています。このため、実験用家畜ブタを購入する現場では、日本SPF豚協会の「認定証」を有するSPF豚を求められる顧客も多いようです。

さて、近年動物福祉に関する規制は年々厳しくなっており、「動物の愛護及び管理に関する法律」に基づき、「産業動物の飼養及び保管に関する基準(平成25年改正)」が制定されています。これに基づき平成28年9月には畜産技術協会が「アニマルウェルフェアに対応した豚の飼養管理指針」をとりまとめました。実験用家畜ブタに関わる機関は、このような関係法令・基準を順守することが大切であると考えます。

医療・医療機器分野の技術革新は日進月歩です。今やSPF豚は我が国の食肉産業への貢献とともに、これらの分野への貢献をも求められています。高品質な豚肉を生産してきたSPF豚の飼養管理技術が医療分野においても花開きつつあります。新たな使命ですので集団でのパワーが求められます。今後、日本SPF豚協会という組織でこれらの使命に対してどのような取組みが出来るのかを協会の皆さんと考えていきたいと思っています。

SPF種豚と認定農場の分布

(2017年3月末現在)

表1. 認定農場の分布

飼養母豚数	北海道	東北	関東	北信越	東海近畿	中四国	九州	合計	母豚総頭数
99以下	2	0	6	0	0	0	0	8	515
100～299	4	7	22	4	0	2	6	45	8,534
300～599	6	5	8	3	1	8	6	36	14,854
600～999	2	10	4	2	0	1	11	31	24,598
1,000以上	0	10	3	0	0	3	7	23	30,908
計	14	32	43	9	1	14	30	143	79,409
育成・肥育専門農場	0	4	10	5	0	2	14	35	
合計	14	36	53	14	1	16	44	178	
母豚総頭数	4,942	25,901	14,779	3,417	0	7,615	22,755	79,409	

表2. 認定農場数および飼養母豚数の推移

地域	2012年度		2013年度		2014年度		2015年度		2016年度	
	農場数	飼養母豚数								
北海道	15	4,929	15	5,016	15	5,096	14	4,903	14	4,942
東北	34	26,875	32	25,446	33	26,438	31	25,975	32	25,901
関東	48	15,618	46	14,824	45	14,598	42	14,546	43	14,779
北信越	10	3,654	10	3,544	9	3,441	9	3,421	9	3,417
東海近畿	3	168	1	0	1	0	1	0	1	0
中四国	15	6,629	15	6,607	15	7,457	14	7,630	14	7,615
九州	31	22,998	31	23,283	31	23,106	32	23,943	30	22,755
育成・肥育専門農場	33		33		33		35		35	
全国	189	80,871	183	78,720	182	80,136	178	80,418	178	79,409

例年同様やむを得ない事情により認定を休止している農場については、戸数は集計に含め頭数は含めない。認定農場数は178（G・G P・G P農場19、子豚育成・肉豚肥育専門農場含む）と、前年度に比べ横ばいながら、飼養母豚数は減少した。これは、九州地区の中規模農場の退会と、既存数農場における減頭によるものである。農場形態や地域の特徴には大きな変化はみられない。

全国の飼養母豚数84.5万頭（畜産統計、2016年2月現在）に占める認定農場SPF豚の割合は9.4%となり、前回より0.3ポイント上昇した。

CM認定農場の生産成績

(2016年度)

表1 一貫生産農場

	件数 109	母豚数 平均	生産指数	農場回転率		農場飼料要求率		出荷頭数/母豚		A薬品費/肉豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	1.70	15.00	3.19	25.00	21.35	40.00	286	20.00
A	27	611	124.74	1.94	17.12	3.05	26.13	24.18	45.29	54	36.19
B	27	474	111.51	1.78	15.73	3.22	24.79	22.33	41.83	155	29.16
C	27	421	100.78	1.73	15.23	3.23	24.70	21.24	39.79	271	21.05
D	26	515	92.01	1.65	14.60	3.34	23.84	20.77	38.91	362	14.65
最高成績			133.48	2.19	19.33	2.48	30.54	27.38	51.30	1	39.92
最低成績			81.63	1.43	12.59	3.77	20.45	15.40	28.84	444	8.98
平均値		505	107.40	1.78	15.68	3.21	24.88	22.14	41.48	209	25.36

表2 繁殖専門農場Ⅱ（分娩・離乳後、子豚を育成し出荷している農場）

	件数 10	母豚数 平均	生産指数	分娩回数／年		離乳頭数／母豚		出荷子豚数／母豚		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	2.30	20.00	22.53	20.00	21.43	40.00	160	20.00
A	3	1,027	125.89	2.45	21.29	26.23	23.29	25.66	47.89	53	33.42
B	3	1,342	115.64	2.41	20.92	24.40	21.66	22.86	42.68	77	30.38
C	2	960	102.00	2.36	20.47	23.49	20.85	22.41	41.83	170	18.85
D	2	889	97.74	2.38	20.73	23.95	21.26	23.04	43.00	218	12.76
最高成績			132.62	2.49	21.67	26.70	23.71	26.30	49.08	11	38.58
最低成績			96.52	2.29	19.92	21.46	19.05	20.37	38.03	238	10.30
平均値		1,081	112.41	2.40	20.90	24.68	21.91	23.65	44.14	116	25.46

表3 繁殖専門農場Ⅰ（分娩・離乳後、直ちに出荷している農場）

	件数 5	母豚数 平均	生産指数	分娩回数／年		離乳頭数／母豚		出荷子豚数／母豚		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	2.30	20.00	22.53	20.00	22.53	40.00	90	20.00
平均値		900	128.47	2.53	22.00	27.93	24.80	27.90	49.53	36	32.14

表4 子豚育成農場（繁殖専門農場Ⅰから離乳子豚を導入し、肥育用素豚として出荷している農場）

	件数 2	出荷頭数 平均	生産指数	1日平均増体重(g)		出荷率		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	445.00	40.00	95.00	40.00	70	20.00
平均値		54,170	129.88	544.12	48.91	98.68	58.78	62	22.19

表5 肥育専門農場Ⅱ（繁殖専門農場Ⅱまたは子豚育成農場から豚を導入し、肥育している農場）

	件数 18	出荷頭数 平均	生産指数	農場飼料要求率		出荷率		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	3.30	55.00	97.50	25.00	126	20.00
A	5	9,339	119.91	2.98	60.38	98.19	31.89	78	27.63
B	5	10,198	106.16	3.67	48.93	98.85	38.47	134	18.76
C	4	14,340	99.79	3.10	58.31	97.54	25.41	151	16.03
D	4	13,301	93.56	3.61	49.88	98.37	33.72	189	9.96
最高成績			128.04	2.32	71.35	99.35	43.55	12	38.07
最低成績			84.79	4.00	43.38	96.40	14.03	200	8.32
平均値		11,569	105.76	3.34	54.41	98.27	32.68	134	18.66

表6 肥育専門農場Ⅰ（繁殖専門農場Ⅰから子豚を導入し、肥育している農場）

	件数 1	出荷頭数 平均	生産指数	農場飼料要求率		出荷率		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	3.25	55.00	95.00	25.00	196	20.00
平均値		11,865	112.30	2.93	60.45	93.04	15.21	33	36.64

表7 肉豚または子豚1頭当たりA薬品費使用

一貫生産農場

薬品費／肉豚	農場数	平均金額
100円未満	33	50
100円～199円	16	139
200円～299円	21	239
300円～399円	30	350
400円～450円	7	427
		209
最高		1
最低		444
上位25%の平均	27	54

繁殖専門農場Ⅱ

薬品費／子豚	農場数	平均金額
100円未満	5	56
100円～199円	2	106
200円～280円	3	225
		116
最高		11
最低		238
上位25%の平均	3	53

肥育専門農場Ⅱ

薬品費／肉豚	農場数	平均金額
100円未満	5	53
100円～200円	13	166
		134
最高		12
最低		200
上位25%の平均	5	78

以下に、国内のPRRSウイルスの5つの遺伝学的グループの特徴を挙げます。

クラスターI：九州地方で確認されている。

クラスターII：国内で使用されている弱毒生ワクチン株が属し、これに近縁なウイルス株。

クラスターIII：東日本に多く、日本独自のウイルスグループ。クラスター内でも多型になってきている。

クラスターIV：北米や東南アジアで流行している。最近、国内において浸潤していることが確認され、北米において流行しているウイルス株と近い関係であることから新たに国外から侵入した可能性が考えられる。

クラスターV：一地域に限定。

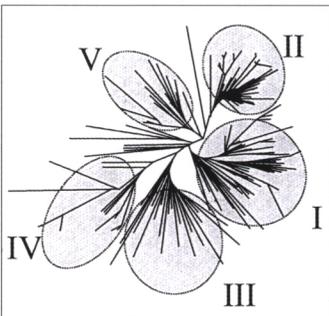


図 ORF5の遺伝子配列を基に作成した分子系統樹

PRRSウイルスでは、遺伝子配列の一致率が98%以上であると同じウイルスであると推定され、同じ遺伝学的グループ内のPRRSウイルスにおいては比較的高い遺伝子配列の一致率を示します。

一方、異なる遺伝学的グループに属するPRRSウイルス間では遺伝子配列の一致率がやや低くなります。このようにPRRSウイルスのORF5の遺伝子配列を調べることにより、そのウイルスの由来や遺伝学的グループが分かり、PRRS対策の一助となります。

最近まで国内では北米型PRRSウイルスのみが検出されていましたが、2008年の発育不良豚由来の材料より初めて欧州型PRRSウイルスを分離しました。遺伝子解析の結果、我が国で初めて分離された株は、米国で報告された株に非常に類似していることが明らかとなりました。その後、野外調査を進めていますが、これまでのところ欧州型PRRSウイルスの検出は分離した株以外に1例を検出しています。よって、国内では限定的であり、欧州型PRRSウイルスは国内に浸潤していないと考えられています。

PRRSの病態：PRRSウイルスの伝播力は強く、主な伝播経路としては感染豚の移動と空気伝播です。伝播様式は、感染豚の唾液、咽頭粘膜、尿、精液、糞便との経鼻、経口または性交による直接的な接触、感染血液による針の汚染など人為的なものもあります。また、ハエや蚊などの節足動物による機械的伝播が起こることもあります。さらに母豚から胎子に伝播し、胎子の死あるいは虚弱子の産出といった垂直感染もあります。PRRSウイルスが感染すると肺やリンパ組織に拡がり、全身に拡散します。ウイルス血症はウイルス株にもよりますが通常3～4週間と長期間持続します。また、扁桃やリンパ節などの組織ではさらに長期間ウイルスが存在する場合があります。一般的にPRRSウイルスが初めて入った農場では、母豚の流死産と子豚の呼吸障害による損耗率の上昇が見られます(流行型)。

一方、既にPRRSウイルスが浸潤している農場、いわゆる常在型では、発生の規模や症状の程度は農場によって異なりますが、これは浸潤しているウイルス株、宿主の免疫状態、混合感染、飼養環境や飼育管理、衛生状態などの要因によるものです。初発農場では、はじめに一部の豚が発熱、食欲不振、元気消失、呼吸器症状などが認められ、続いて、流産や死産を主徴とする繁殖障害、新生豚の死亡や呼吸障害が多く見られるようになります。流死産の発生は2～3ヶ月で終息しますが、離乳豚や肥育豚では呼吸障害が継続し、子豚の呼吸障害が常在的に持続していくことが多くなり、特に、若齢であればあるほど重篤な症状となり致死率は高くなります。呼吸促迫、眼瞼浮腫に加え、腹式呼吸を示す激しい呼吸障害が観察されます。回復した場合には発育不全でヒネ豚となります。呼吸器病の多い農場では、環境因子や二次感染によって重症化する傾向にあり、特に、二次感染は重症化となる大きな問題であり、PRRSウイルスはさまざまな病原体が関与する豚呼吸器複合病(PRDC)の主要因子です。(以下次号)

ネズミ対策～粘着シートへの反応～

岐阜大学応用生物科学部特任准教授 森部 絢嗣

ネズミを捕獲する粘着シートは、手軽に設置でき、死体に触れずに処理できることから多くの施設で導入されています。一方で適切な設置を施していないために捕獲効果が上がらず放置されている粘着シートも多く見られます。

粘着シートを設置する場合は、ネズミの経路を完全に塞ぐようにし、餌は普段豚に与えている餌をシートの中央に撒いておきます（図1）。警戒心の強い個体を慣らすために食べなれている飼料を周辺にも散布しておくことで出沒数を増加させることができます。



図1. 粘着シート上に配合飼料を散布

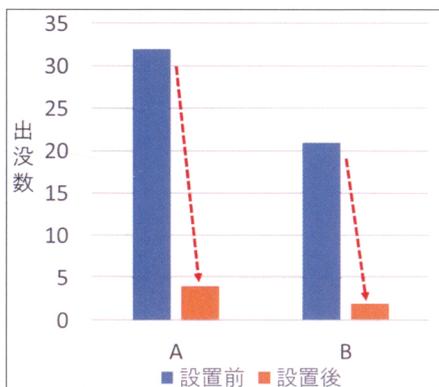


図2. 既製の粘着シートを2地点A, Bにそのまま設置した前後15日間のネズミの出沒数。

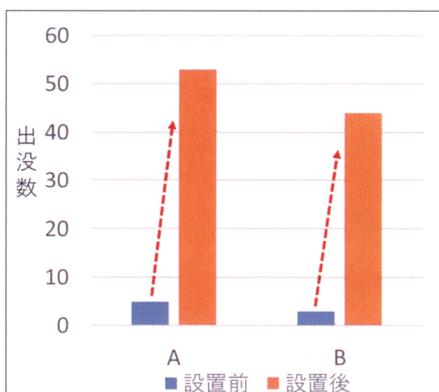


図3. 既製の粘着シートの中央部およびシート周辺に配合飼料を散布し、地点A, Bに設置した前後15日間のネズミの出沒数

図2は既製の粘着シートをネズミの移動経路へそのまま広げて設置した際の設置前後15日間のネズミの出沒状況を示したグラフです。既製の粘着シートをそのまま設置すると、ネズミは移動経路を遮られまたは警戒し、粘着シートへの出沒は減少しました。この状態では粘着シートに埃等が付着し、捕獲効率が下が

ります。そこで粘着シート中央部および周辺へ畜舎で使用している飼料を散布したところ、出沒が少なかった状況から大幅にネズミを誘引することができました（図3）。このことでネズミが粘着シートに触れる機会を増加させることができます。トレイルカメラを使用すれば、ネズミの出沒状況を簡単に把握できますが、ない場合は周辺に散布した飼料の消失量を知ることで

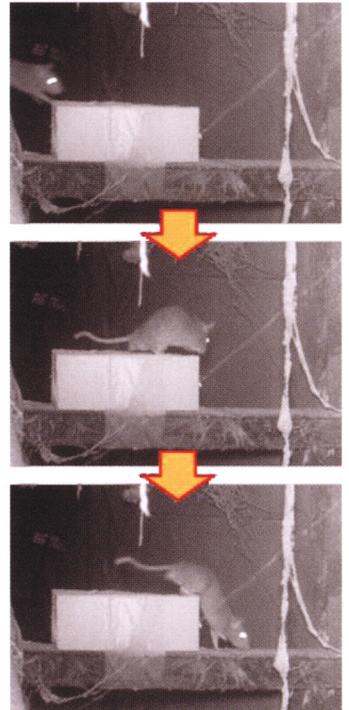


図4. 箱型粘着シートを乗り越えて避けるネズミ

粘着シート設置場所へネズミが出沒しているかどうか知ることができます。飼料を散布してもネズミが来ない場合、設置場所を変更する必要があります。図4は粘着シートを箱型に変更して設置していますが、ネズミはその上を走行しているため、罠としての役割を果たしていない状況です。この場合、この設置方法を止め、適宜設置場所および設置方法を変更します。限られた罠で効果をあげるためには流動的に罠の設置場所や方法を変更することも重要です。

害獣対策に必要なことは、対策実施者の意欲を持続させることであり、そのためには対策行為に対して何かしら動物の反応をすぐを知ることができる状況を作り出します。トレイルカメラでもいいですし、餌量や糞量、足跡などでも構いません。粘着シートを設置しても何もリアクションがない場合、意欲が減退し、そのまま放置されてしまうことに繋がります。

<訂正とお詫び>前号まで執筆者の森部先生の肩書きが間違っておりました。昨年9月より特命准教授に就任されております。訂正し、お詫び申し上げます。（編集部）

ト◆ピ◆ツ◆ク◆ス

「こども食堂」への協力の輪が拡大 千葉県の認定農場が次々SPFポークを提供



1月14日に開催された妙典こども食堂。東の匠SPF豚を使った角煮と豚汁が大好評、参加者から寄せられたお礼の言葉は生産者グループに届けられたそうです。

前号でご紹介した、千葉県市川市で定期的開催されている「市川こども食堂」。

前号ご協力いただいた千葉県認定農場・(株)林商店肉豚出荷組合（東庄町）、(有)下山農場に

続き、東庄町の生産者グループで「東の匠SPF豚」ブランドを展開している「JAかとり東庄SPF豚研究会」（会長・高木敏行（有）東海ファーム社長）にも快くご協力をいただきました。厳しい予算で運

営している中、豚肉は貴重食材でスタッフにも大変喜ばれています。さらに、千葉県内の他の認定農場にもご協力をご快諾いただいております。認定農場数が最



2月4日開催の行徳こども食堂では角煮とポークチョップ(提供：(有)下山農場)



2月25日の浦安こども食堂。(株)林商店肉豚出荷組合では豚肉の他に野菜や卵も提供、お肉たっぷりのハヤシライスやゆで卵がメニューに。



も多い千葉県ならではの、地産地消、食育にもつながる意義のある取り組み、さらなる広がりをお願い、今後ご紹介していきます。

●認定情報●

●平成29年3月認定農場

(認定期間：平成29年3月10日から30年3月31日まで)

北海道・全農飼料畜産中央研究所上士幌種豚育種研究室、秋田県・(有)十和田湖高原ファーム、全農畜産サービス(株)由利本荘SPF豚センター、(株)シムコ大館GGPセンター、宮城県・サンエス丸森農場、(株)シムコ岩出山事業所、茨城県・(有)中村畜産、全農飼料畜産中央研究所、同実験動物豚舎、千葉県・(株)スターピッグファーム、鈴木治彦養豚、飯田養豚、(株)シムコ館山事業所、(有)ピギー・ジョイ第2農場繁殖農場、同肥育農場、(有)伊藤養豚飯岡農場、(有)鍋木ピッグファーム、平野英

夫SPF豚農場、長野県・(農)エスピーエフこがねや第二農場、JA全農長野SPF繁殖センター、JA大北白馬アルプス農場、富山県・(株)シムコ八尾GGPセンター、島根県・奥出雲ファーム(有)、愛媛県・(株)多田ファーム天貢農場、熊本県・全農畜産サービス(株)西日本原種豚場、(有)やまとんファーム、(有)ピッグファーム陳、(株)佐々牧場、同第二農場、宮崎県・(株)ナンチクファーム守山細田農場、鹿児島県・鹿児島いずみ畜産(株)出水農場、同阿久根農場 (以上32農場)

※次回認定委員会は平成29年6月8日の予定

SPFポークの豚味噌

●レシピ提供・「すっぴん」店長 下釜 健輔（東京都杉並区西荻）

鹿児島では定番という「豚味噌」。人気居酒屋店の店長に教えていただきました。甘めの味付けが白いごはんにも、芋焼酎にも相性抜群だそうです。ぜひお試し下さい。

●材料●

SPF豚ロース肉 100g
<合わせ調味料>
白味噌 大さじ1
砂糖 大さじ2
みりん 大さじ2
酒 大さじ1
ピーナツクリーム 小さじ1
白ごま
油 適量

●作り方●

- ① ロース肉は食べやすい大きさのサイコロ状に切ります。
- ② 合わせ調味料をよく混ぜておきます。
- ③ フライパンに油をひき、①を入れて炒めます
- ④ ②を加え、焦がさないように気をつけながら水分が飛ぶまで炒めます。
- ⑤ 白ごまをお好きなだけ振ってからめします。
- ⑥ お皿に盛り付けて完成です。



【下釜シェフからのアドバイス】

ピーナツクリームを加えるとコクと甘みがまして、おいしくなります。

●協会からのお知らせ●

●理事会を開催

平成28年度の理事会を3月24日（金）、協会事務所に開催し、6月の定時総会に諮る議事等について協議いたしました。

●代議員会を6月に開催

今年度の代議員会（社員総会）は、6月15日（木）に開催する予定です。代議員の皆さまには後日ご案内をお送りいたします。次号に詳細を掲載いたします。

●代議員・理事の交代

組織内人事異動により、ホクレンピラミッド選出の代議員および理事が、篠原禎忠氏から小師 聡氏に交代いたしました。また、同じく九州地区選出代議員および理事が松本伸一氏（宮崎県・株ファームテック）から吉見隆治氏に交代いたしました。なお、今号の提言をお願いした全農畜産サービスピラミッドの種田貴至理事は、北島克好協会会長の後任理事として就任い

ただいております（北島会長は会員外理事）。

●50周年記念事業の準備をスタートします

協会は2年後の2019年秋に設立50周年を迎えます。記念事業について、検討・準備を開始いたします。

●ポークリーフレットを増刷いたしました

協会ホームページでもご案内の通り、認定農場産SPFポーク販促資材としてご好評

いただいておりますリーフレットを増刷いたしました（A6判、4ページ、一部改訂）。会員の皆さん、認定農場産SPFポークを販売されている

小売店、関係者には無料でお送りいたします。ご希望の方は事務局（TEL.03-5835-5375、FAX.03-5835-5376）までご連絡ください。





富良野スワインファーム(有)
倉島 順一さん
●北海道富良野市

苦労をバネに高成績、尊重し合 い趣味に没頭のおしどり夫婦

協会の生産成績優秀CM農場表彰制度がスタートしてから10年、第1回目と節目の10回目に2度、総合生産成績部門で最優秀賞を受賞した富良野スワインファーム。残念ながら表彰式はいずれもご欠席。ならばと、真冬の富良野までうかがうことにしました。

「あんな成績では恥ずかしいですよ」と成績に悩む農場が聞いたら…、なことをおっしゃる社長の倉島順一さんは樺太(ロシアサハリン州)生まれで13人兄弟の7番目。小学3年生のとき樺太から引き上げ富良野に。旭川の工業高校卒業後北海道電力に20年勤務、うち発電所勤めが10年。仕事は面白かったものの「勤め人は向かない」と4回も辞表を提出、そのたびに慰留されますが、ストレスからか胃潰瘍をわずらうことに。入院した病院で出会ったのが、看護学校に通いながら勤務していた奥様の久美子さん。久美子さんの卒業と同時に結婚、勤めを辞め退職金で農地を購入、堆肥のために豚を飼ったのが養豚の始まりでした。

資格を活かし電気工事の頼まれ仕事をこなしながら、豚舎も一から手造りし、450頭規模にまで拡大します。SPF豚に切り替えたのは20年ほど前、理由は「とにかく病気が多かったから」。規模も150頭に縮小し、オランダまで行って当時最先端だった空調コントロールシステムを研修、農場に導入しました。これがかなりの優れもので、つい最近まで故障もなく稼動していた



倉島順一さん、久美子さんご夫妻

そうです。決断の早さにも経営手腕が伺われます。

事故率も大幅に下がり薬品費も激減したことから、高成績を維持しています。そのこつは? 「毎日きちんと、決まったことをやるだけです。慣れるのがこわい」。従業員教育にもその信念が行き届いているようです。

久美子さんも子育てのかたわら、数年前までずっと農場に。「いやだと思ったことは一度もありません。好きだったんでしょうね」。さぞやご苦労なされたと思うのですが、穏やかな笑顔でおっしゃいます。順一さんは「半分以上はおかげかな」。この“以上”に妻への感謝がにじみます。

今は悠々自適、ダイビングに、パラグライダーにとアクティブな順一さん。どちらも70歳を過ぎてから始めたというのにはびっくりです。旅行も思い立つとすぐお一人でも気楽に海外へ。オーロラを観にご夫婦でフィンランドまで行ったことも。写真の腕前も玄人はだしです。久美子さんはというと、今は社交ダンスに没頭されているそうです。お互いを尊重しながら日々を過ごされているご様子、厳しくも温かい富良野の自然のような、お人柄が伝わってきました。(編集部)

編集後 新年度が始まりました。今年の目標は何にしましたか? 凡事徹底(今号の「SPFのひと」の倉島さんの言葉にもある通り)、整理整頓(環境と心)、ABC精神(当たり前のことを、ポケーとせず、ちゃんとやる)などはいかがでしょう。小さな積み重ね、弛まぬ日々の精進が一つの形を作り上げていきます。自分が納得する成果への一里塚と言えるのでは…。また「段取り八分、仕事二分」といいます。泥縄式の取り組みとはおさらばしましょう。(世)



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは
日本SPF豚協会の
登録商標です

日本SPF豚協会だより

第67号 2017年4月1日発行(季刊)
発行 一般社団法人 日本SPF豚協会
〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
e-mail : j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/
発行人 北島 克好
編集人 藤田 世秀